

魅

力人

みりよくびと

Seino Kazuya

福島市を拠点に活動している「劇団120〇EN」は、2011年3月11日、公演中に東日本大震災に被災した福島大学演劇研究会のメンバーを中心に旗揚げをした、アマチュア劇団です。「福島に住む人々のルーツを辿る演劇集団」として、「盃森の長次郎狐をモチーフにした「妖怪遺言」など、福島市に伝わる民話や歴史を下地に創作劇を定期的に上演し続けて今年で8年目に入りました。代表の清野和也さんに、福島市で演じるきっかけと魅力をお聞きしました。

※信夫に伝わる民話に登場する「信夫の三狐」の中の一匹。

第17回 インタビュー

「劇団120〇EN」代表
清野 和也 さん

1990年山形県東根市生まれ。「劇団120〇EN」代表・脚本・演出家。中学時代に演劇に目覚め、高校演劇部所属時から脚本を書き始める。日本劇作家協会東北支部主催「とうほく劇の陣」で3位入賞。10・20代の演劇活動団体の発表の場「POP演劇祭」代表。2016年から福島市西地区歴史発見事業として荒井や佐原地区にゆかりのある素材を生かした芝居の上演を実施。2017年に開催された福島市制施行110周年記念行事のアトラクションでは、詩人・和合亮一さんプロデュースのもと演出を務めた。



面白い芝居が見られる
面白い芝居がまちに人が集う
親が子どもに語る
面白い芝居を届けたい



2017年公演の「荒川ジュリエット」の一幕。清野さん（中央）は脚本だけでなく演者として舞台上立つことも

求められている、人々の力になれるんだと思います。声をかけて集まってきた仲間10人と立ち上げたのが「劇団120〇EN」（現15人）です。数字には缶ジュース1本買うような気持ちで気軽にお芝居を観て心を潤してほしいという願い、「EN」には「演」「縁」「円」「宴」などたくさん意味を込めました。

芝居に登場した山や川が身近に観劇の後も余韻は続く…

2011年4〜12月は、毎月オリジナル作品を上演し続けていたのですが、次第に「それでいいのか」と考えるようになったと清野さん。「演

福島の民話や歴史は、過去のことではなく今とつながっている



劇団120〇ENの皆さんは仕事の合間に練習を重ねて舞台上立つ（左）／2016年公演の「思わざらまし六つの花」は信達義民の佐藤太郎右衛門を取り上げた（右）



劇って福島でなくても観られるんですよね。そうした時に、福島でしか観られない作品があったら面白いんじゃないかと思いついたんです。翌年、演劇活動を休止し、資料集めや聞き取りを始める。民話や歴史は、決して過去のことではなく脈々と今につながっていることに気付きました。以後、清野さんたちは「福島に住む人々のルーツを辿る演劇集団」をコンセプトに活動するようになります。再開第1弾となった2013年6月の演目は、信夫に伝わる狐の話「妖怪遺言」でした。会場は、信夫山にある福島県護国神社の神楽殿。観客はその伝説に関わる地で観劇するという贅沢を味わいました。「演劇って

缶ジュースを買うように気軽に
お芝居を観て心を潤してほしい

振り返れば、中学の時に演じるのと、表現することの面白さにはまり、高校も大学もその延長線上でやってきたため、演劇を生業（なりわい）には全く頭になかったと話す清野和也さん。大きなターニングポイントになったのは東日本大震災でした。「福島大学演劇研究会での公演中に被災しました。辛い誰もけがはなく、逆に演者である私たちがお客さんに支えてもらいました」。劇団旗揚げのきっかけは、清野さんたちの舞台を見ていたお客さんの声でした。

「当日演じていた舞台の幕はまだ降りていないまま、大学再開まで何をしたらいいかわからなかった時にいただいた『演劇観たいんだよ』という声に背中を押されました。当時、市内での文化公演はほぼ中止という状況で、どんな不安の中でも芸術活動は

劇場を出た後も続くもの。お芝居に出てきた山や川、建物が身近にあつたら素敵じゃないですか」。夢は？と、お聞きすると「劇団120〇ENの芝居を観た人たちが父親、母親になったとき、福島に住む人々のルーツを辿る面白い物語を子どもたちに話してくれるようになることです」と清野さん。「面白い話から面白いまちとなって人を呼び、故郷を離れたときには思い出さずしてその人の誇りになるような芝居、その先に続く作品を作りたいと熱く語ってくださいました。たくさんのお客様のお芝居。まずは、11月の公演「絹が鳴る」を観にいらっしやいませんか？

絹が鳴る

脚本：清野和也、演出：齋藤勝之
日時／2018年11月4日（日）午前10時30分～正午 午後2時～3時30分
場所／旧広瀬座（福島市民家園内）
定員／各250人 入場料／500円（中学生以下無料）
チケット販売／福島市民家園、あづま総合体育館、西学習センター、西支所、文化課
出演／劇団120〇EN、福島市西地区の皆さん
西支所 ☎024-593-1001

「絹が鳴る」あらすじ
さまざまな藩の小さな領地が入り乱れていた福島市西地区が舞台。戊辰の戦火に追われるように荒井の山中に集った7人元藩士、芸人などの中に、蚕を育てることでだけが取り柄の娘がいました。7人は、新政府に一泡吹かせようと自分たちの国を作ろうとするが…

Next Stage

西地区ふるさとの歴史再発見事業「絹が鳴る」
脚本：清野和也、演出：齋藤勝之
日時／2018年11月4日（日）午前10時30分～正午 午後2時～3時30分
場所／旧広瀬座（福島市民家園内）
定員／各250人 入場料／500円（中学生以下無料）
チケット販売／福島市民家園、あづま総合体育館、西学習センター、西支所、文化課
出演／劇団120〇EN、福島市西地区の皆さん
西支所 ☎024-593-1001